

論文の和文要旨

論文題目

15世紀～16世紀初頭の古スンダ語写本作成のネットワーク：カブユタン・チブルイに保管されている古スンダ語写本の分析

氏名

RAHMAT SOPIAN

第1章では、カブユタン・チブルイ所蔵の古スンダ語写本研究のこれまでの歴史と現状を概観する。古スンダ語写本研究において、カブユタン・チブルイ（チブルイは地名、カブユタンは「霊地」の意）は研究対象として非常に興味深い。西ジャワ州ガルット市のチクライ山麓にあり、約1世紀半前に Brümund (1864) によって学界に初めて報告された。現在、カブユタン・チブルイは、古スンダ語写本を最も豊富に所蔵する伝統的な写本保管所 (scriptorium) と見なされている。古ジャワ語写本の専門家である Willem van der Molen は、カブユタン・チブルイにおける古スンダ語写本について、その起源は明らかでないものの、古ジャワ語写本の伝統的保管所として知られる中部ジャワのムルバブの写本と同じくらい古いとする (1983, 113)。

カブユタン・チブルイ写本の起源を明らかにするために多くの試みが行われてきた。その一つは、インドネシア国立図書館 (PNRI) にある古スンダ語写本コレクションとの照応である。Pleyte (1914b, 365–441) は *Poernawidjaja* (PNRI 416) の写本に関する研究の中でチクライ山（カブユタン・チブルイが位置する山）の周辺にあるスリマンガンティという地名に着目している。写本作成の場所とみなされるこの地名は、*Carita Ratu Pakuan* (PNRI 411及び410) の写本の「奥書」に記載されている。Pleyte は1904年にチブルイ村の村長からの聞き取りとガルットの副知事 G. K. van Huls van Taxis との往復書簡によってスリマンガンティの調査を試みた。写本作成の場所を指すスリマンガンティという地名は、*Darmajati* の写本 (PNRI 423) にも見られる (Darsa, Ekadjati, and Ruhimat 2004, 18–19)。スリマンガンティの他に、チクライ山での写本作成地に言及している PNRI 所蔵写本として、*Pitutur ning Jalma* (PNRI 610) と *Bima Swarga* (PNRI 623) がある (Holil and Gunawan 2010, 133–136; Wartini et al. 2010, 276)。また、*Sanghyang Swawarcinta* の写本にはチクライ山頂への言及がある (Wartini et al. 2011, 100)。しかしながら、カブユタン・チブルイに現存する古写本に関する調査結果からは、カブユタン・チブルイを写本作成の場所と明示的に述べたものは1つも見いだされなかった。

カブユタン・チブルイ写本の起源について、本研究では、カブユタン・チブルイに現存する写本とカブユタン・チブルイ以外の写本との関連性を調査した。調査では、カブユタン・チブルイ所蔵写本のこれまでの研究（未公表を含む）を精査し、分析から得られた写本のテキスト、題目、作成地などの情報は、公刊済みの他の古写本の情報と照合した。

調査では、これまで1987年から2020年にかけて実施されたカブユタン・チブルイ所蔵写本の調査結果を再検討し、明らかにされた事実および欠落点を明確にした。その要点は以下のとおりである。(1) カブユタン・チブルイ写本群は3つの保管箱に保管されているが、これまでの研究は1番目の箱にある写本に偏っている。(2) 一つのクロパック(写本貝葉を保管する小さな木箱)に納められたほとんどの写本貝葉には複数の異なったテキストが混在している。(3) 以下の写本については題目が特定された：*Kisah Putra Rama dan Rawana*、*Tattvajñāna*、*Sewaka Darma*、*Kawih Katanian*、*Bima Swarga*、*Sang Hyang Hayu*、*Kawih Manondari*。

第2章では、本論文の中心となるカブユタン・チブルイ所蔵写本の分析をおこなう。最初に、カブユタン・チブルイの概観を示したあと、参与観察をおこなったセバ儀礼について説明する。セバ儀礼は、毎年、カブユタン・チブルイにおいて近隣の人々が参集して執り行う儀礼で、祖先から伝承された貝葉写本への敬意を示す行為によって、祖先への恭順と敬愛を表明する。この儀礼の伝統的な実施が結果的にカブユタン・チブルイでの古スンダ語写本の保存を可能としたこと、その一方で、古い文字の読解力をもたず内容を知らない地域住民による取扱いの結果、皮肉なことに、写本の保存において、貝葉の順序、位置や保存箱の入れ替えがおこることにもなった。

続く節では、カブユタン・チブルイ写本貝葉の識別と分類のプロセスを詳述する。識別においては、カブユタン・チブルイに現存する写本貝葉の総数を確認した。写本貝葉を識別する番号付けは、現地での調査結果と、大英図書館の *Endangered Archives Programme* およびパジャジャラン大学の *Ancient Manuscript Digitation and Indexation* に記録されたデータとを照応することで検証した。その結果、これまでの記録データにある誤りを正し、現在、カブユタン・チブルイには総数727枚の写本貝葉があることを確定した。現地において、これらの貝葉は26個のクロパックに分けて納められ、これらのクロパックは大小3つの保管箱に保管されている。727枚の貝葉は、文字が書かれた703枚、文字が書かれていない13枚、さらに断片化した小片11枚に分けられる。

カブユタン・チブルイの写本貝葉の正確な数を把握した後、写本作成に使われた文字の種類に基づいて、古スンダ文字、西部古ジャワ方形文字、そして、現代ジャワ文字もしくは現代バリ文字(両者は基本的に同一)に分類した。この結果、古スンダ文字の貝葉は480枚、西部古ジャワ方形文字の貝葉は222枚、現代ジャワ文字または現代バリ文字の貝葉は1枚であることが判明した。

次の段階として、すべての写本貝葉を、筆跡に基づいて分類した。この作業が必要となったのは、カブユタン・チブルイのほとんどの写本貝葉は異なったテキストが混在する状態になっているうえに、損傷が多いため、テキストの内容をただちに分析することが困難だからである。異なった筆跡は異なった写本筆記者による写本の作成を意味しており、筆跡による分類をまず実施することで、写本のテキストを判別し、題目や主題を探しだすことが容易になる。筆跡の分析から、カブユタン・チブルイ所蔵写本のうち、古スンダ文字写本には20種類、西部古ジャワ方形文字写本には5種類の異なる筆跡を確認することができた。筆跡分類を踏まえた結果、古スンダ文字写本からは7点のテキスト題目、西部古ジャワ方形文字写本からは2点のテキスト題目を特定することができた。

筆跡分類によっても題目が明らかにならなかった写本貝葉については、ローマ字転写をおこない、テキストの題目あるいは主題の特定を以下の複数の方法によって試みた。(1) 公刊された他の古スンダ語写本との比較、(2) 題目を示す語の検索(通常、写本の冒頭または末尾のコロフォンに出現)、(3) 公刊された写本との類似性がなく、冒頭または末尾の貝葉が欠落または破損して題目が特定できない一部の写本については、テキストの内容から主題を確定、の3つの方法である。第1と第2の方法によって、それぞれ5種類の筆跡の写本についてテキストの題目を、さらに、第3の方法によって、6種類の筆跡の写本についてテキストの主題を特定することに成功した。最後に、カブユタン・チブルイ所蔵写本から得ることができた写本作成の時期、場所、筆記者に関する情報の分析をおこなった。

第3章では、第2章の分析結果に基づいて、カブユタン・チブルイ所蔵写本と他の写本との関係の解明を試みる。具体的には、写本のコロフォンの記述およびテキストに見られる類似性の分析を試みた。カブユタン・チブルイ所蔵写本のうちコロフォンがある写本から得られた情報を検討した結果、カブユタン・チブルイに現存するいくつかの写本が、西ジャワ州ガルット市のチクライ山、西ジャワ州バンドン県のシサンティ、西ジャワ州クニンガン県のヌサヘランに由来することが判明した。カブユタン・チブルイ所蔵写本と他の写本とのテキストの類似性を検討した結果、カブユタン・チブルイ所蔵写本のいくつかは、中ジャワ州ブルブス県グヌン・クンバンのクタ・ワワタン、西ジャワ州ボゴール県のカブユタン・コレアン、中ジャワ州ボヨラリ県のムルバブ山、西ジャワ州バンドウン県、バンテン州のパナイタン島、およびバリ州と直接的または間接的な関係を持っていることが判明した。

結論として、カブユタン・チブルイが、古スンダ語写本が作成され保管されてきた写本保管所 (*scriptorium*) であることが検証された。カブユタン・チブルイが写本の作成地であったという想定は、同地において、同じ題目の複数の写本、未完成の状態の写本、および伝統的な筆記用具の遺物が現存することからも裏付けられる。また同地で作成された写本のみならず他の場所で作成されて持ち込まれた写本の保管場所であることは、現に古スンダ語写本が多数保管されていることに加えて、カブユタン・チブルイ以外の作成地に言及する写本が発見されたことによって裏付けられる。

その一方で、カブユタン・チブルイで作成された写本が他地域に移動した可能性については、A.B. Cohen Stuart や N.J. Krom などのオランダ人学者が提起している。彼らは、カブユタン・チブルイ以外の場所で伝承されてきた複数のスンダ語写本について、コロフォンの中に写本の作成地としてカブユタン・チブルイ地方(スリマンガンティ、チクライ山、チクライ山頂など)が記されていることを指摘している。実際には、これらの写本は、西ジャワ州のバンドン (*Bima Swarga*, PNRI 623)、西ジャワ州のワナルジャ(ガルット) (*Pitatur ning Jalma*, PNRI 610)、および西ジャワ州のガルフ (*Carita Ratu Pakuan*, PNRI 410および411) で発見されており、これらの写本がカブユタン・チブルイ地方で作成されたのちに移動した可能性を示唆している。以上から、15世紀から16世紀初頭にかけて、いわゆる「スンダ王国」の全盛期と対応する時期において、西部ジャワを中心に中部ジャワおよびバリにまで広がる古スンダ語写本の作成と移動のネットワークが存在したことが想定されることを指摘した。

